

塩尻の文学

第7号 (洗馬宗賀)

芥川龍之介・小穴隆一・瓜生卓造・田部重治
吉江喬松・小島烏水・笹沢佐保

* 読者おすすめ本
「眼の気流」松本清張

塩尻が舞台になっている文学作品を紹介します。
美しい塩尻を見つめてみましょう。

2009年 3月29日発行



Akahiko

Kishiko

Masumi

Bokusui

Shiki

Utsubo

『庭』 芥川龍之介

「宿」というのは洗馬宿、「本陣」は洋画家小穴隆一の実家・志村家のことだと言われています。芥川龍之介と小穴隆一は親交があり、小穴は芥川の著書の装丁や挿絵を描きました。

昔はこの宿（しゅく）の本陣だった、中村と云ふ旧家の庭である。

庭は御維新後十年ばかりの間は、どうにか旧態を保ってゐた。瓢箪なりの池も澄んでみれば、築山（つきやま）の松の枝もしだれてゐた。栖鶴軒（せいかくけん）、洗心亭（せんしんてい）、— そう云ふ四阿（あずまや）も残ってゐた。池の窮（きわ）まる裏山の崖には、白白と滝も落ち続けてゐた。和の宮様御下向の時、名を賜はったと云ふ石灯籠も、やはり年年に拡がり勝ちな山吹の中に立ってゐた。しかし、その何処かにある荒廃の感じは隠せなかった。〔中略〕

芥川龍之介

小説家。東京都生まれ。（1892-1927）

芥川賞は芥川龍之介の業績を記念して菊池寛が設けた。

『鯨のお詣り』 小穴隆一

子供時代の思い出を書いた随筆集です。「洗馬宿」と題した作品には、旧洗馬小学校の屋根にあった木曾義仲の像について書かれています。

伯父 K 伯父

さうよ、松本藩廃止して天領となり、伊那県となり、筑摩県となり長野県となるかな、俺らはどうも・・・といふのが、やはり順なのであらう。あそこは木曾の三宿の一つで、貫目改所があった土地である。地名の由来が、遠い昔、木曾ノ義仲がその馬の脚の傷を自分で洗つてやつた、といふにあるかと思へばまた、ここで二人あすこで三人と飯盛女を抱へてゐた。木曾街道六十九次、広重の錦絵で見ると、さびゆく秋の色ぞかなしきであるが、木曾の奥からは、女房子が馬を曳いておらやのつつさを迎えに出張ってもきた賑やかな場所であつたはずである。はるばる江戸まで稼ぎにいつて銭を持ったとつさが、郷里のちかまでやれやれと大事なところでゆるみだし、少しは財布の紐もはづさうか、かかさはさはさせじの木曾の入口、そこがK 伯父さんの生れた土地なのである。〔中略〕

小穴隆一

洋画家。（1894-1966）

塩尻市洗馬で幼少の一時期を過ごす。実家は洗馬宿元脇本陣の志村家。父の代に小穴姓を継いだ。

『櫂の冬』 瓜生卓造

菅江真澄のことや、真澄が過ごした釜井庵について書かれています。

洗馬村

洗馬から西に五キロ、洗馬村がある。奈良井川左岸の段丘に軒を寄せる小さな集落だが、木曾路の入口に当たり、かつて多くの文人墨客が杖を曳いた。謎の旅人といわれる菅江真澄も、天明三年に郷里三河を出奔して三州街道を北上、彼の不思議な旅の最初の冬を洗馬で送っている。

古い村だが、昔の面影は残していない。中央に立派な舗装道路が走り、両側にならぶ家々も、石を置いたであろう板屋根は、カラートタンや瓦にふきかえられてしまった。

村のほぼ真中あたりを西に折れると、細径の行詰まりに赤い鳥居が建ち、妙義山神社とある。背後は険しい崖山で、戦国の世、妙義山城主三村氏が山上に砦を構えた。山腹に台地がひらけ、右手の奥に草庵が見える。「釜井庵」という。真澄はここで天明三年五月から翌四年の六月まで、十三カの月日を送り迎えた。のち庵は火災に遭ったが、寛政七年に再建され、原型をとどめている、という。〔中略〕

瓜生卓造

小説家。神戸市生まれ。（1920-1982）

登山、探検をテーマとする作品を多く発表。

『忘れえぬ山山』 田部重治

書の題名に「山山」とあるのに、あえて高原の桔梗ヶ原を取り上げているところに着眼したいです。

桔梗ヶ原

〔中略〕 もう桔梗ヶ原に這入った。右に葡萄園があつて、そこに立ち働きをしている人が、往来の人と話している。大田南畝の紀行に洗馬から塩尻に向う途中、乗鞍ヶ岳を遠望しつつ桔梗ヶ原を眺める雄大な情趣が述べられているが、恐らくその頃には、この原は今とは異り中山道から茫々として引続いていたのであろう。〔中略〕

途中はどこを見ても葡萄園と林檎畠、ところどころアスパラガスや落葉松の苗を植えた畠がある。やがて赤松の亭々として聳ゆるところに出る。このあたりは未開墾地で、桔梗、月見草、ひめじおん、蛍袋などが咲き乱れている。大体、ここは海拔二千四、五百尺ほどの高原地帯、これが方数里に跨れる桔梗の咲き乱れた昔のままの原であつたら、どんなにこそ美しいことだろう。〔中略〕

田部重治

英文学者・登山家。富山県生まれ。（1884-1972）

日本アルプスや秩父山地の魅力を表現した。

『砂丘』 吉江喬松

中山道を歩き、洗馬のまちの様子や、歌い伝わる洗馬節について書かれています。

洗馬節

〔中略〕「梅雨晴れのわたくし雨や雲ちぎれ」一芭蕉が木曾の原から此駅（このえき）へ出て、駅を出抜けて桔梗が原へさしかゝった時の吟だそう。緑の草に、雲の陰影が鮮かで光にまじって雨足早く、雲をこぼるゝ銀白の美しさ、いかにも、伸びやかな、狭い所から広い天地を眺めやる広々とした感じ、大原の爽かさを現はしてゐる趣きがあるが、其頃の洗馬の駅路の様は十分にはわからない。只其頃から残ってゐる大きな旅宿が、僅かに旧時の形見を見せてゐるばかりである。

家々の表戸は大方閉ざされて、二階の欄干から軒へ、蚕飼用の竹籠が雨除けに立て並べてある。暗い家の中には、人が住んでゐるとも思はれない。青草を茹つて、高く馬に積んで、通つて行くもの、枯木を背負つて、とぼとぼ山から帰つて来るもの、駅路は真昼時でも、他に行客の姿すら見られない様だ。

旧時からうたひ伝へて来た「洗馬節」といふのが、今でも残つてうたはれてゐる。追分節に似た節で、一種の寂しい離愁を催させるやうな調子がある。〔中略〕

吉江喬松

フランス文学者。塩尻市生まれ。（1880-1940）

1916年渡仏、ソルボンヌに学び1919年帰国。早稲田大学
仏文科主任教授となる。

『秋の木曾街道』 小島烏水

桔梗ヶ原から歩いて洗馬宿へ向かう様子が書かれています。自然の美しさや宿で鯉を食べたことなど。

二 洗馬宿

〔中略〕

原着きて細川藤孝肱掛の松といふを左に見る、こゝよりは洗馬の宿なり、北国街道の追分とて、昔はさばかりの繁昌はありけむ、今は人の身にも霜のそぼ降る時節とよ、家構へ由ゝしき宿屋の天井は、火口のごとく煤ぶりて、庖丁にて掻き落したげなるを仰ぎながら、昼餉（ひるげ）の準備を命じ置き、裏の庭へ廻れば、山吹、黄菊、四季咲の菖蒲など池をめぐりて咲き乱れたり。柴垣を跳り越え、大根畑を横ぎりて、ちょんぼり茂れる杉木立の下蔭を潜り、だらだら阪を下れば、義仲馬洗ひの水とて、潦（にわらずみ）ほどの水溜りは、頓（やが）てぞこの宿の名に負ひける。手拭冠たる村の乙女の、大根洗へるが袂を水に濡らさじとや、白い前歯にちょと嘯みたる、さすがに慎ましげなり。

小島烏水

香川県生まれ。（1873-1948）登山家、随筆家、文芸批評家。登山、探検をテーマとする作品を多く発表。

『木枯し紋次郎 中山道を往く（二）』 笹沢佐保

宿場で出会った人々と関わりながら旅する紋次郎。
悪人たちに敢然と立ち向かう姿が胸を打ちます。

一里塚に風を断つ

風が唸っている。並木の松が遠くから、順次風に逆らって梢を騒がせた。それが地鳴りのような音となって、近づいて来るのだった。空は厚い灰色の雲に被われて、その下を黒い雲が逃げるように西から東へと流れて行く。渡世人は、そうした空をぼんやりと見上げていた。

中山道は洗馬の宿場、街道が三筋に分かれるあたりだった。その渡世人は街道筋の、草むらの中に身体を横たえていた。渡世人の足許（あしもと）に、棒杭の道標が立っている。それには、『右中山道、左北国往還・善光寺道』とあった。〔中略〕

笹沢佐保

小説家。（1930-2002）交通事故で自宅療養中に執筆した『招かれざる客』でデビュー。

～ 読者の方から、おすすめ本です ～

『眼の気流』 松本清張

タクシー運転手の末永は、客の二人連れが気になります。
慣れない雪道の運転や、無神経な客の言葉にいらつきました。

運転手の場合

「恵那タクシー」の運転手末永庄一は、配車係から峡西館に行くように云いつけられた。三月に入った朝である。

「お客さんは上諏訪までだ」と配車係は云った。

岐阜県恵那市から長野県上諏訪までは大体百四十キロくらいある。列車のほうがずっと楽だが、ときたま、こういう車の客がないでもない。しかし、雪どけの中仙道の悪路を走るのは決して快適ではない。〔中略〕

峠を下ると、奈良井の宿である。石を置いた檜皮葺きの屋根にも雪がまだらに残っている。恵那市を出て、すでに三時間以上経っていた。陽はかなり傾いていた。

雪道の運転は骨が折れる。それも解けたり凍ったりしているので始末が悪い。車は泥を浴びているので、帰ってからの掃除が思いやられた。

奈良井をはずれると、平沢、贄川、日出塩となって、ようやく平地に下りてきた。えらく客席が静かになったと思ってバックミラーをのぞくと、二人とも疲れて睡りこけていた。〔中略〕

松本清張

小説家。（1909-1992）1953年「或る『小倉日記』伝」で芥川賞を受賞。以後作家活動に専念する。

▲▼▲ 図書館は友だち・いつでも・どこでも・誰にでも ▲▼▲

参考資料

(塩尻市立図書館でお借りしました。)

- 「芥川龍之介全集第4巻 筑摩全集類聚」筑摩書房
- 「木枯し紋次郎 中山道を往く(二)」笹沢佐保 中公文庫
- 「松本清張傑作総集Ⅱ」新潮社

(塩尻市立図書館の相互貸借サービスでお借りしました。)

- 「小島烏水全集第四巻」 大修館書店 *長野県立図書館より
- 「鯨のお詣り」 小穴隆一 中央公論社 *上田市立図書館より
- 「櫻の冬」 瓜生卓造 木耳社 *上田市立図書館より
- 「砂丘」 吉江喬松 *上田市立図書館より

(塩尻市立図書館のレファレンスサービスで閲覧できる図書館を教えてください。)

- 「忘れえぬ山山」田部重治 *信州大学附属図書館松本合同図書館